

日付	2010年7月28日(水)
講師	独立行政法人国際協力機構(JICA) 人間開発部 保健第一グループ長 渡邊 学
カテゴリ	政府・政府機関
主なテーマ	国際保健分野における JICA の取り組み
概要	<p>1. 日本の協力の3つのキーワード</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 人間の安全保障 ② ミレニアム開発目標 ③ キャパシティ・ディベロップメント <p>2. 良い協力とは何か?</p> <ul style="list-style-type: none"> - 日本と違いがあるということを前提に我々は何をなすべきか? 国際協力を行う上で重要な視点は、トップダウンとボトムアップのアプローチで、開発途上国の自立発展性を高めることである。 <p>3. 事業モデルと案件事例 (バングラデシュ、ガーナ、セネガル)</p> <p>4. JICA の保健分野協力方針</p> <ul style="list-style-type: none"> - 戦略性の強化 (限られた資金の有効活用) - 説明責任の強化 - 現場の知見と政策への反映 - 他ドナーとの関係強化
目的及び意味合い	<p>本講義は、日本の国際協力実施機関であり、主要ステークホルダーの一翼である国際協力機構が、如何なる保健戦略のもと現地で活動を実施しているか、現状課題認識を行い、今後の国際保健戦略を考える目的で行った。</p> <p>参加者は、渡邊学氏の活動経験を踏まえた講義を聴き、実際に現場の状況を把握すると同時に、国際協力機構の国内外の他ステークホルダー等との連携事例について、複数の事例を学ぶ機会となった。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ JICA の基本スタンスである、Think Globally, Act Locally は国際協力を考える上で大変参考になった。国際保健政策について、グローバルな視点での検討を主眼に捉えてきたが、ローカルな視点を取り入れた政策をグローバルに展開することを考えることも重要だと気付いた。

日付	2010年7月28日(水)
講師	福元 満治 ペシャワール会事務局長(広報担当理事)
カテゴリー	NGO
主なテーマ	ペシャワール会の活動と国際保健におけるNGOの重要性
概要	<p>1. ペシャワール会は、パキスタンでの医療活動に取り組んでいた医師の中村哲を支援するために1983年に結成された非政府組織である。現在はパキスタン北西辺境州および国境を接するアフガニスタン北東部で活動している。</p> <p>2. ペシャワール会は、主にハンセン病の治療に取り組んでいたが、2000年の大干ばつ時の赤痢患者急増をきっかけに、清潔な水の確保のため、アフガニスタンの村々で水源確保事業を開始した。</p> <p>3. 2001年の米軍によるアフガニスタン空爆の際には「アフガンいのちの基金」を設立、アフガニスタン国内避難民への緊急食糧配給を実施した。日本から募金により、2002年2月までに15万人の難民に配給を行った。</p> <p>4. 2010年2月、アフガニスタン東部で灌漑用水路建設(全長約25.5km)を完遂した。現在は、水利事業を含めた総合的農村復興事業「緑の大地計画」を進めている。</p>
目的及び意味合い	<p>本講義は、医療活動を中心に活動を始め、現在は水利事業を含めた総合的農村復興事業「緑の大地計画」を推進しているペシャワール会の活動を通じ、保健医療のみならず、地域の生活基盤の改善を進めている日本発のNGOによる好事例について理解を深めることを目的として行った。</p> <p>参加者にとって、現場の視点から、コミュニティとの協同事業を通じて課題の根本原因を解決する、という持続可能な開発援助のあり方を再考する機会となった。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ ペシャワール会はもともとヘルスケアの向上を目的として援助を始めたが、主要な疾患が悪環境によるものつきとめ、水質改善に援助内容がシフトしたことがわかった。根本原因の特定、課題解決まで介入する援助はなかなかできることではないが、その点で、現地密着型で取り組むNGOへの理解と支援は重要であると感じた。 ・ 現場で活躍されている福元氏の講義は、臨場感があり、印象的であった。現地に介入するためには、現地の人々との信頼関係が重要であり、それは一日でできるものではない。信頼関係をつくるためには、現地の人と共に事業に取り組む、結果を出すまでの長いプロセスが必要であると感じた。

日付	2010年7月29日(木)
講師	荒木 光弥 株式会社国際開発ジャーナル社 代表取締役・主幹
カテゴリー	メディア
主なテーマ	世界と日本の援助潮流(比較)
概要	<p>1. 世界と日本の援助潮流</p> <p>国連(マルチラテラル)をベースにした援助理念と、日本(バイラテラル)の援助政策を比較し、国益をベースにした日本の援助政策の変遷を考える。</p> <p>2. 主要国援助の国際比較</p> <p>主要国の援助政策にみる各国の国家戦略あり方と、官民連携へ注目の集まりを捉える。</p> <p>3. 中国の援助潮流</p> <p>日本の「開発輸入」に学んだという「貿易と投資」を柱に、中国の対アフリカ支援は、中国とアフリカ双方のニーズに対処している。</p> <p>4. 世界の勢力図の激変</p> <p>「かつて人口の80%を占める南側の所得は、世界の20%を占めるにすぎない」から、今では世界の40%以上のシェアを占めるようになり、一方、先進国の所得シェアは50%まで下降。世界の援助潮流は大きく方向を変え始めている中、大きな潜在能力をもつ民間資金とのジョイントにより、BOPビジネスをはじめ、新たな開発援助の道が開けつつある。</p>
目的及び意味合い	<p>本講義は、約40年にわたり「国際開発ジャーナル」を発刊している国際開発ジャーナル社の荒木氏を迎え、世界と日本の援助潮流の変遷、また国際協力の普及啓発の現状と課題について、メディアの視点を提供していただき、参加者と共有することを目的として行った。</p> <p>世界の勢力図の変遷に伴う、BOPビジネスをはじめとする新たな開発支援のあり方は、参加者に開発と経済の一貫性を印象付けると同時に、革新的な発想で国際保健課題解決に向けて一般市民を巻き込む仕組み作りへの示唆を得る機会となった。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> 国際開発や海外の諸問題に関心のない一般の人々の注意を喚起することの難しさを改めて感じた。普及が進まない理由は、広報を行う主体にも受け手である社会にもあると思うが、一般市民の意識の変容が政策の実現につながる過程を学んでみたい。

日付	2010年7月29日(木)
講師	沢田 貴志 特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会 副代表理事
カテゴリー	NGO
主なテーマ	地域の中で命の格差に取り組む
概要	<p>シェア＝国際保健協力市民の会の取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> - エイズ対策(タイ、南アフリカ等)の活動を通じ、開発途上国でのエイズ対策の鍵は以下のとおりである。 <ul style="list-style-type: none"> ・ エイズを自分たちの問題として捉える環境作り ・ 少ない資源を有効活用してケア・サポートを拡充する ・ HIV陽性者自身の社会参加を促進する - 在日外国人支援 通訳体制の整備、ソーシャルワーカーによる相談システムの拡充等により、在日外国人への医療支援を行っている。 <p>→ 地域の中での命の格差に取り組むネットワークの構築 行政サービス、NPO、医療機関のネットワーク構築を通じた地域のコミュニティ強化により、外国人を含む全ての人の医療アクセスの向上を図ることができる。</p>
目的及び意味合い	<p>本講義では、NGOによる現場の経験・知識の蓄積とその意味合いの拡大を知ることで、ボトムアップの視点から今後の国際保健政策のあり方を捉え直すことを目的とした。事例を通じた講義により、参加者は、コミュニティ・ディベロップメントを通じた、地域の人々が主体となる持続的な取り組みの重要性を知る機会を得た。</p> <p>また、シェア＝国際保健協力市民の会は、国外での取り組みのみならず国内における在日外国人支援も行っており、国際保健を途上国の問題ではなく、国内の身近な事例として捉える示唆を得た。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 途上国の保健医療の問題は、私たちが考えている以上に複雑であり、社会・経済・文化等様々な要因が複合的に保健問題のとして表れていることの証左であろう。その多様な原因に対処するために、住民が主体的に考え、改善法を検討することは、地域住民がこのような衛生環境の改善・管理を保健医療体制導入後も継続させていくことにもつながる。 ・ 沢田先生のお話を通じ、開発には外部者の介入も大事かもしれないが、それ以上にコミュニティ内から湧き上がる「何とかしたい」という気持ちを、具体的な組織作り、活動への参画へとつなげることが大事なのではないか、というメッセージを発信されていたように思う。

日付	2010年7月29日(木)
講師	金田 晃一 武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーション部 シニアマネジャー
カテゴリー	企業
主なテーマ	CSR と国際保健医療
概要	<p>1. CSR とは何か</p> <p>CSR とは、事業遂行にあたり、法令遵守はもとより、人権・労働・環境面に配慮することである。個々の具体的な内容は、企業に対する社会からの期待や陽性の変化に応じて、常に変化する。</p> <p>2. 企業市民活動</p> <p>企業市民と市民社会の間をパートナーとなる NGO/NPO、国際機関、政府、プラットフォーム等が媒介し、企業市民活動が成り立つ。</p> <p>3. 製薬企業の CSR 課題</p> <p>「いのちに関わる製品」を扱うため、製品安全性、個人情報管理や治験管理への格別の配慮が必要である。</p> <p>4. タケダの CSR</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タケダ・イニシアティブ (アフリカにおける保健医療人材の育成・強化プログラム) パートナー：世界エイズ・結核・マラリア対策基金 寄付金額：年間1億円 (2010年から2019年までの10年間継続)
目的及び意味合い	<p>本講義は、CSR の一環として、世界基金への寄付を通じたイニシアティブを推進している武田薬品工業の取組みを通じ、企業の CSR 活動の実態、今後の発展可能性についての理解を深めることを目的とした。</p> <p>タケダ・イニシアティブの具体例を通じ、企業と国際機関等のパートナーとの連携を通じた CSR 活動により、企業の持続可能性の追求が、グローバルな課題解決への貢献、ひいては持続可能な社会の実現につながる可能性があることを理解する機会となった。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ CSR についての基本的な考え方から、タケダの具体的な取組みまで知ることができた。企業の取組みが短期的な財務的利益だけでなく、長期的/非財務的利益によっても支えられていることを強く意識できた。 ・ 企業がなぜ CSR への取組むのか、またそのインパクトの大きさを知り、今後の国際保健課題解決に向けた企業の果たし得る役割の大きさを知ることができた。

日付	2010年7月30日(金)
講師	平林 国彦 国連児童基金東京事務所 代表
カテゴリー	政府・政府機関
主なテーマ	国際保健政策とユニセフの活動
概要	<p>1. 国際保健の現場</p> <p>平林氏はボリビア、インドネシア、ウズベキスタンにおける国際保健の現場経験を経て、国際保健課題解決に向けて、政策から現場までの全てのレベルに関わらなくてはならないという問題意識をもった。</p> <p>2. 日本の国際保健戦略</p> <p>日本が継続的に国際保健分野で貢献し、また国際社会で日本のプレゼンスを保つためには、日本のプレーヤーのみで取り組むのではなく、他国や国際機関等と柔軟な連携を図りながら、オールジャパンプラスでのアプローチが重要である。</p> <p>3. 国際保健分野での活躍を目指す学生へのメッセージ</p> <p>国際保健分野を目指す人材に求められるものは「Technical Knowledge」、「Building Trust」、「Team Work」である。</p>
目的及び意味合い	<p>本講義は、国際機関の活動体系を知ること、参加者が、国際保健をグローバルなアクターの視点から、とらえることを目的とした。また、平林氏自身が国際保健に関わるようになった経緯、体験を共有して頂き、人材養成に際するキャリア構築の示唆を得る目的で行った。</p> <p>国際社会の安定のために日本が貢献することが、ひいては自国の安全を守ることになる、という国際的文脈と国内的文脈が相互互惠関係にあることが、参加者に共有された。</p>
学生からのコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 講義の中で印象的だったのは、「公平な社会ほど社会的コストが低いということは、すでに証明されている」ということだった。日本が発展途上国と関わる上で、ビジネス提携するだけでは格差社会をより広げるだけであるが、ビジネス提携とともに、教育や医療、ガバナンスといったソフト面の改善をすることが最終的には経済的に大きな効果を生む、というのは新しい気づきとなった。 ・ オンリージャパンではなく、オールジャパン、オールジャパンプラスとして国際的土俵に上がり、議論に加わる必要がある、との指摘により、国際協調の重要性を改めて認識しました。

キャリアナイト

<p>実施目的</p>	<p>グローバルな活躍をしている多様なキャリア体験者とプログラム参加者の直接的な交流機会を創出することで、国際保健分野での人材養成に関して、参加者が定性的情報を獲得することを目的として、キャリアナイトと称して、セッションを設けた。</p>
<p>実施方法</p>	<p>■ 日時：2010年7月29日（木）18:30-20:30</p> <p>■ 会場：東京大学大学院医学系研究科 3号館1階 S101号室 サマープログラムの開催場所である教室を使用し、コの字型からシアター形式に椅子を並べ変え、通常の講義とは異なるカジュアルな雰囲気のもと、参加者とパネリストが気軽に対話できる形式にした。</p> <p>■ パネリスト（敬称略）：</p> <p>政府・政府機関</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 金森 サヤ子 外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官 ・ 諏訪 理 国際協力機構（JICA）気候変動対策室 <p>企業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 金田 晃一 武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーション部 シニアマネジャー <p>NGO</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 金平 直人 ソケット 代表 <p>■ 実施体系</p> <p>4名のパネリストが「座右の銘」を提示し、それに基づいて各自のキャリアについて話した後に参加者からの質問を受け付け、歓談の時間を設けた。</p>
<p>概要</p>	<p>■ プログラム</p> <p>1. 18:30-19:50：各パネリストによる「自身のキャリア構築について」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 金森 サヤ子（外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官） 3+αアドバイス：幅広い関心と人間関係をもつこと；知的好奇心を持ち続けること；これだという自分の芯をもつこと+キャリアだけにとどまらないこと ・ 諏訪 理（国際協力機構（JICA）気候変動対策室） 国際的なキャリアの道は10年先、20年先の見通しはなかなかたてづらい。しかし、こういう仕事がしたい、という自分の気持ちに正直であれば、何をするにもタイミングを逃すことは絶対でない。 ・ 金田 晃一（武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーション部 シニアマネジャー） 業務時間外の時間を有効に使い、自らの成し遂げたいことを多角的に進めた結果、数

	<p>回に渡る転職を経て、今の自分のキャリアがある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 金平 直人（ソケット 代表） 世界の問題はどんどん複雑に大きくなっていく。世界の行く末は、我々の世代がいかに世界の課題を解決できるかにかかっている。 <p>2. 19:50-20:30 質疑応答</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 参加者からは「目の前にきたチャンスをつかむコツは何か」、「人生において自分にとって重要なものの二者択一を迫られたときにどうするか」などの質問が寄せられた。 <p>国際的な仕事をしている、多様な背景をもつ各パネリストのキャリアの話聞き、参加者は自身のキャリア構築に向けて多様な視点を得て、グローバルに活躍する先輩とのネットワーク構築の機会を創出した。また、歓談の時間を利用し、参加者が若手からミドルキャリアのパネリストに個別にアドバイスを求めることができた。それにより参加者にとってのキャリア構築に寄与するセッションとなったとともに、国際保健分野における人材養成のシステム構築について、定性的な深度を伴った情報を獲得する機会となった。</p>
参加者のコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 8 日間で最も印象深いセッションの一つだった。いらっしゃった先生方全員が自らの興味や夢を追い、慎重に取捨選択し、たゆまぬ前進を続けたことの結果としてグローバル・キャリアをもっていらっしゃり、参加者のロールモデルとなり得る魅力的な方々だった。 ・ バックグラウンド、興味分野、キャリアパスの異なる方々だったので、様々な意見が聞けてよかった。日程、時間帯もちょうど良かった。 ・ 比較的若い世代の方がいらっしゃったので、ざっくばらんに質問をすることができ、有意義であった。

政策提言

政策提言 作成 プロセス	<p>■プロセス</p> <p>1～2日目 課題の設定：問題の背景および範囲と重大さ (プログラム：事前課題、プレナリー・セッション、基本スキル)</p> <p>事前課題への取組み、「国際保健の潮流」や「国際保健政策概論」等のレクチャーを受け国際保健の概観を把握し、各班に与えられた政策提言テーマにおける問題の背景及び範囲、またこれまでどのような取組みがなされていたかについて理解を深める。また、「政策提言作成プロセス」の講義により、今回のプログラムで取組むべき政策提言フレームワークを明確に提示した。</p> <p>2～5日目 現状理解：課題の分解と絞り込み・構造の把握・仮説の設定と検証 政策の選択肢：打ち手の立案・比較・選択 (プログラム：分野横断的な講師によるレクチャー、リフレクション)</p> <p>分野横断的な講師によるレクチャーや質疑応答、またそれらのレクチャーを第三者の視点で捉えなおすリフレクションの時間を使いながら、現状を多面的に捉え、問題の根本的原因は何かを考える。また、課題に対する解決策の考案、その予想効果や実現可能性についてまとめた。</p> <p>5～7日目 提言・実行戦略：提言の選択理由・実行戦略の概要 (プログラム：政策提言作成、中間発表会)</p> <p>各班で議論した内容をもとに、提言の主旨、具体的な実施戦略をまとめる。中間発表会にてメンターによるコメントを受け、翌日の政策提言発表会に向けて全体の練り直しを行った。</p> <p>8日目 政策提言発表 (プログラム：政策提言発表会)</p> <p>班ごとに政策提言を発表する。各班に対して、政策立案者や講師から政策提言の良い点、改善し得る点のフィードバックを行った。</p>
政策提言 発表会	<p>■ 日時：2010年8月1日（日）10:00-12:00</p> <p>■ 会場：東京大学大学院医学系研究科教育研究棟 14階 鉄門講堂</p> <p>■ 講評者（敬称略）： 逢沢 一郎 自由民主党 衆議院議員 川田 龍平 みんなの党 参議院議員 渋谷 健司 東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室教授 谷口 和繁 世界銀行 駐日特別代表</p> <p>■ 式次第</p> <p>10:00 開会</p> <p>10:10 衆議院議員 逢沢一郎先生によるメッセージ</p> <p>10:20 政策提言発表及び参加者、講師からのコメント（20分×4班）</p> <p>11:40 参議院議員 川田龍平先生によるメッセージ</p> <p>11:50 コメント／総括</p>

	<p>渋谷健司（東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室教授） 日本医療政策機構</p> <p>12:00 閉会</p>
政策提言概要	<p>テーマ1「国際保健政策を広く国民に普及啓発するためのアドボカシー活動構築のあり方」</p> <p>A班 「NEGI イニシアチブ（Newly Established Global Initiative）」の名のもと、日本政府が健診を通じて日本と開発途上国双方の健康増進を図るメカニズム「健診 For Two」を導入し、日本国民に国際保健政策の普及啓発を広く行う。</p> <p>B班 企業の国際保健活動への取組みを助成等の政策で推奨し、経済活動を通じて持続可能なかたちで日本国民に国際保健への理解が波及する仕組みを構築する。売上の一部を途上国に寄付するキャンペーン展開、途上国向け商品の展開等が対象となる。</p> <p>テーマ2「国際保健政策分野でグローバルに活躍できる人材を日本から輩出するために求められるアクション」</p> <p>C班 多ステークホルダーが結集し、国際保健分野での日本の政策提言能力の強化、教育、人材交流を行うグローバル・ヘルス・シンクタンクを政府主導で創設する。</p> <p>D班 企業と NGO による BOP ビジネスを通じた国際保健課題への持続的な取組みを目指し、それに沿った人材養成アクションプランを設計する。企業と NGO 間の関係構築により、企業は NGO への財政支援を行う代わりに NGO から現地の情報を得ることが可能であり、政府は双方のマッチング等を政策として支援する。</p>
結果と考察	<p>1. 分野横断的なステークホルダーによるレクチャーによる多角的な視点の獲得により、4班の政策提言は、それぞれ官民パートナーシップあるいは多ステークホルダーによる連携に注目したものが発表された。国家戦略としての国際保健の重要性を理解し、地球規模の課題解決に向けた各ステークホルダーの強みを活かした連携体制が、途上国の健康課題の解決、ひいては国際社会における日本の安全につながることを強調された。</p> <p>2. 政策提言作成プロセスに沿ったプログラム構築であったため、各班の政策提言は、政策提言の必須項目である課題設定、現状理解、打ち手、実行戦略が盛り込まれ、論理的であった。一方で、クロスステークホルダーの連携の重要性を理解しながらも、最終的に政府向けの提言にまとめた班が多かった。今後、国際保健課題解決に向けて、民間の果たす役割への期待が大きくなっている現状を鑑み、今後このような政策提言作成プログラム開催時には、各ステークホルダーのそれぞれの役割について提言をまとめる形式とすることが期待される。</p>



国際保健政策サマープログラム2010 報告書

Global Health Policy Summer Program 2010 Report



日本医療政策機構
Health Policy Institute, Japan



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

目次

1. 「国際保健政策サマープログラム」とは	2
2. 「国際保健政策サマープログラム」概要	3
3. 政策提言まとめ	8
4. 講師とメンターのご紹介	9
5. 参加者一覧	10
6. サマープログラムを終えて	11

「国際保健政策サマープログラム」とは

地球規模課題の中でも重要な課題のひとつである国際保健は、途上国で貧困や疾病により失われる命を削減することを目的としている。近年では、ODA資金を拠出する政府機関だけでなく、ビル&メリンダ・ゲイツ財団や世界エイズ・結核・マラリア対策基金をはじめ、市民社会や民間企業が様々なかたちで国際保健分野に関わるようになってきている。急速なグローバル化に伴い国際保健の重要性がますます高まる中、当プログラムでは、この分野に関心のある様々なバックグラウンドをもつ学生が結集し、日本の国際保健政策における重要課題を議論し、政策提言をまとめた。国際保健に対する問題意識を、いかに具体的な政策につなげ、世界に対してより大きなインパクトを与えることができるのか。世界のために語り合ったこの夏の経験を活かし、従来のキャリア構築の枠を超えた、地球規模課題の解決に貢献するグローバルな人材として、世界に羽ばたくことが期待される。

プログラムの流れ

多様なバックグラウンドをもつ学生に対し、包括的かつ先端的な学びの場を提供すべく、以下の流れでプログラムが運営された。



【プログラム内容】

グローバルなキャリアに求められるスキル研修

国際保健政策の概論についての講義や、戦略コンサルタントや米国のビジネススクールからの講師による問題解決フレームワークやコミュニケーション・スキル研修により、政策提言作成の基礎を身につける。

第一線で活躍する講師によるレクチャー

国際保健に取り組む、政府、アカデミア、シビル・ソサエティーなどの最前線で活躍するリーダーからの講義を受け、現在の国際保健分野における課題を把握する。

政策提言作成

収集した情報をもとに、専門家の監修の下、実際の社会にインパクトをもたらし得る政策提言を作成する。

政策提言発表

国際保健課題に取り組む国会議員や各種メディアを招待した発表会で政策提言を発表。

【本年のテーマ】

学生は4グループに分かれ、以下2点のテーマをそれぞれ2班が取り組み、政策提言を作成した。

1. 国際保健政策を広く国民に普及啓発するためのアドボカシー活動構築のあり方
2. 国際保健政策分野でグローバルに活躍できる人材を日本から輩出するために求められるアクション

【開催期間】

2010年7月25日(日)～8月1日(日)

【開催場所】

東京大学本郷キャンパス

【参加者】

大学、大学院に所属する学生(海外の大学、大学院に所属あるいは海外の大学院への進学が決まっている学生、留学生を含む。)

【主催】

特定非営利活動法人 日本医療政策機構／東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室

「国際保健政策サマープログラム」概要

(敬称略)

7月25日(日)

オリエンテーション1 /アイスブレイキングセッション

日本医療政策機構事務局/渋谷 健司(東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 教授)

参加者の顔合わせを行い、本プログラムの意義、プログラムの流れ等の説明を行った。参加者は事前課題を踏まえ、本プログラム参加にあたっての各自の問題意識の所在について述べ、各自が本プログラムを通じて何を得たいのかを確認した。続いて、8日間ともに政策提言作成に取組む各班のメンバーと政策提言テーマの発表を行い、どのような姿勢で各カリキュラムに取組み、政策提言を作り上げるかを共有した。

問題解決手法

山崎 蘭加(ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト)

政策提言作成に向けての思考プロセスを学ぶ目的で、プログラムの初日に行った当講義では、参加者がグループに分かれて演習問題に取り組んだ。ロジックツリー、イシューツリーといった概念で、論理的に議論を展開する手法を学び、課題分析、現状理解、打ち手の検討、提言・実行戦略といった一連の問題解決プロセスについて演習を重ねた。その後8日間のプログラム中、参加者は当講義によって得られた問題解決手法の基本スキルに頻繁に立ち返り、ロジックに基づいた視点からの議論を試みた。

政策提言作成プロセス / 政策提言作成ガイドライン

坂野 嘉郎(JPモルガン証券株式会社)

乗竹 亮治(特定非営利活動法人 日本医療政策機構 マネジャー)

本講義では、医療政策の実例をみることで、現在の政策形成プロセスが、これまでの限られた関係者によるものから、限られた財源、統治機構改革、情報化社会などの理由により、国民世論を巻き込んだマルチステークホルダーの政策形成プロセスへ変容していることが説明された。その上で、今回の政策提言作成においても多様なステークホルダーによる講義を受け、課題を多角的にとらえた上で、問題解決手法を用いてテーマを深堀し、ロジックに基づいた政策提言を作るプロセスの確認を行った。

7月26日(月)

オリエンテーション2 グローバルヘルス(国際保健)

杉山 晴子(特定非営利活動法人 日本医療政策機構 アソシエイト)

多様なバックグラウンドをもつ参加者全員が国際保健の基礎知識を習得することを目的とし、国際保健のグローバルヘルスの概念、現状と課題、国際社会の取組み等の概略が説明された。特に、近年、保健分野における民間資金が著しく伸び、財団、企業、NGO等の民間のアクターがより大きな役割を担うようになっていること、今後は多様なアクター間がパートナーシップを組み、より効率的、効果的な取組みが求められていることが語られた。

国際保健の潮流

黒川 清(特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事)

英語で行われた本講義は、初めに「なぜ国際保健に取組む必要があるのか」という問いが参加者に投げかけられ、ディスカッション形式で進められた。国際社会における日本の立ち位置、日本にある技術や革新的な発想を用いて開発途上国に将来のパートナーをつくる意義、マルチステークホルダーでの取組みの重要性等がインタラクティブに議論され、参加者は幅広い視点から国際保健を捉える機会を得た。また世界を舞台に活躍することを目指す参加者に向けて、学生のうちに海外に行き、知識・経験を積むとともに、世界中に個人ベースのネットワークをつくることの重要性が語られた。



国際保健政策概論

渋谷 健司(同上)

地球規模課題としての保健問題が、外交、貿易、ビジネスの最前線の課題として捉えられている現状、近年の主要プレイヤーの変遷、国際保健における主な論点が、数値化されたファクトシートとともに紹介された。参加者はデータを見ながら国際保健課題の現状及び課題を定量的に把握し、エビデンスに基づいた議論を展開することの重要性を共有した。また、日英交えての双方向型の講義がなされ、国際舞台では欠かせない、英語での議論を体得する場となった。

我が国による国際保健課題への貢献～新保健政策の策定に向けて～

清水 彩子(外務省 国際協力局 専門機関室 外務事務官 国際保健関係機関担当)

本講義では、政府開発援助(ODA)の概要が説明され、保健課題は地球規模課題であると同時に、重要な外交課題であるという認識が共有された。特に、現場での効果的取組と国際舞台での政策発信の両面を、外務省が強化していく考えであることが強調され、国際保健を巡る現状に即した我が国の新保健政策のコンセプトを作り出す必要性が語られた。参加者は、政策提言作成に向けて、国際保健分野における日本政府の強み、及び他ステークホルダーとの協力により更なる貢献が期待されている現状を理解した。

7月27日(火)

プレゼンテーション、コミュニケーションスキル

山崎 蘭加(同上)

プログラム最終日の政策提言発表会に向けたプレゼンテーションスキルの習得を目的とした本講義では、国際保健課題の現状と課題について短時間でまとめ、発表するというグループ演習が行われた。参加者はプレゼンテーションの組立て、スライドの作り方、発表方法等のプレゼンテーションの基本スキルを学んだ。インタビューやビジネスレターについても触れた後、「伝えたい気持ちが大事」というかたちで締めくられた本講義では、参加者は単なるスキルにとどまらないコミュニケーションのあり方について学んだ。

世界の開発課題と日本の役割

谷口 和繁(世界銀行 駐日 特別代表)

人口推計、巨額の債務残高等、日本のおかれた現状把握が共有され、国際社会で生き残るためには国境を越えた課題にクロス・セクターで取組み、世界とパートナーシップを組むことの重要性が語られた。また参加者が大局的視野で国際課題を捉えることの重要性が強調された。世界銀行の第二の資金供与国である日本が、開発問題をどのように捉え、今後どのように取り組むべきか、本講義を通じて、世界の中の日本という視点で、国際保健を含む開発問題を考える機会となった。

国際NGO、JOICFPのアドボカシー活動

石井 澄江(財団法人 家族計画国際協力財団(JOICFP) 常任理事・事務局長)

本講義では、国際NGOとして国内外で活動展開を行うジョイセフの講義を通じ、今回の政策提言テーマのひとつであるアドボカシー活動の現場とそのプロセスについて理解を深めた。世界の市民団体・組織、その他ステークホルダーと連携や折衝を重ね、声をひとつにして訴えることにより、国連の決定事項さえ変えることができるという事例を通じ、マルチステークホルダー間や同一ステークホルダー内でのコンセンサスビルディングの重要性と、それを可能とするアドボカシー活動の必要性を学ぶ機会となった。

Global Corporate Responsibility

Randall N. Hyer (M.D., Ph.D., M.P.H. Regional Director of Medical Affairs, Vaccines, Banyu Pharmaceutical Co., Ltd.)

本講義は、一層主要な役割を果たしつつある民間企業による国際保健の取組みの事例紹介として、国際保健における企業CSRについて学ぶことを目的として行われた。MSD(Merck Sharp & Dohme)の起業精神に即して行っている、抗エイズ薬や風土病の治療薬の無償給付やワクチンプログラムについて語られた。自社の強みを活かしたCSR活動の展開を通して、持続可能な開発と経済合理性の一致について、その可能性を探る上での具体例を学ぶ機会となった。



7月28日(水)

住友化学のオリセトネット事業を通じたアフリカ支援

西本 麗(住友化学株式会社 執行役員 農業化学業務室 アグロ事業部・国際アグロ事業部 ベクターコントロール事業部 担当)

水野 達男(住友化学株式会社 ベクターコントロール事業部 担当)

国際保健への取組みで世界的に知られる住友化学株式会社のオリセトネット事業展開についての本講義では、住友化学が「自利利他公私一如」の事業精神のもと、国際機関やNGO、企業、途上国政府など、様々な機関・団体と連携し、支援事業を展開していることが語られた。住友化学が開発したオリセトネットは防虫効果が5年以上持続し、経済的かつ効果的に、マラリアを媒介する蚊から身を守ることができるが、その生産技術が無償供与してタンザニアに合弁会社を設立し、現地の雇用創出や経済発展にも貢献している点が説明された。参加者は、営利事業がもたらす単なる支援にとどまらない持続可能な開発の可能性について考える機会を得た。

国際保健の現在・過去・未来～日本の次世代国際保健戦略を考える～

井上 肇(千葉県健康福祉部 理事)

国際保健を巡る歴史的背景、国際保健分野における日本の現状での立ち位置が紹介され、日本に比較優位のある分野に注力した、日本の次世代国際保健戦略について考えた。途上国における疫学的状況がMDGs(母子保健・感染症)から非感染症へ、さらには退行性疾患へ変化していくことを念頭においた政策展開の必要性、また健康保健、介護保険制度等の制度モデルの提供や、ビジネスを通じた日本に知見のある領域での関与の可能性等が語られた。本講義はプログラム中盤において、参加者のこれまでの既成概念をあらためて問い直し、国際保健政策のあり方を再考する機会となった。

政策提言の現場～Patient Advocacyの視点から～

乗竹 亮治(同上)

具体的事例を通じて「政策提言」への理解深めることを目的として行った本講義では、がん対策推進に向けた患者アドボカシーの具体例が紹介された。政策決定に際して、患者の意見を取り込みつつも、立法府、行政府、メディア、企業/民間、医療従事者の各ステークホルダーが対策に共に取組む六位一体モデルが紹介され、マルチステークホルダーで課題解決に当たることの重要性が議論された。

国際保健分野におけるJICAの取組み

渡邊 学(独立行政法人 国際協力機構 人間開発部 保健第一グループ長)

本講義では、人間の安全保障、ミレニアム開発目標、キャパシティ・ディベロップメントにおける日本の協力という3つのキーワードに沿って、求められる国際協力のあり方について考えた。現地の写真を見ながらの双方向型の講義を通じ、国際協力を行う上で、トップダウンとボトムアップの双方のアプローチを通じて開発途上国の自立発展性を高めることができる、との認識を深めた。最後になぜ国際協力をするのか、について参加者が一人ずつ発言し、それぞれの経験に基づく、国際協力を志す動機、想いを知る機会となった。

ペシャワール会の活動

福元 満治(ペシャワール会 事務局長(広報担当理事))

医療活動を中心に活動を始め、現在は水利事業を含めた総合的農村復興事業「緑の大地計画」を推進しているペシャワール会の活動について、多数の現場のスライドをもとに議論が展開された。参加者は現場に寄り添い、コミュニティとの協働を通じて生活基盤全体の改善を進める活動から、キャパシティ・ディベロップメントのあり方について理解を深めた。また、そのペシャワール会の活動資金は寄付によって賄われており、着実な活動、報告が多数の人の継続した支援につながる事が強調された。



7月29日(木)

世界と日本の援助潮流

荒木 光弥(株式会社国際開発ジャーナル社 代表取締役・主幹)

約40年にわたり「国際開発ジャーナル」を発刊している国際開発ジャーナル社の荒木氏を迎えた本講義では、世界と日本の援助潮流の変遷、また国際協力の普及啓発の現状と課題について、メディアの視点が紹介された。参加者は、世界の勢力図の変遷に伴うBOPビジネスをはじめとする新たな開発支援のあり方を通じ、開発と経済の一貫性について考え、また国際保健課題の普及啓発に向けての示唆を得た。

地域の中で命の格差に取り組む

沢田 貴志(特定非営利活動法人 シェア=国際保健協力市民の会 副代表理事)

沢田氏の活動経験に基づいたインドネシアの保健事情、及びシェア=国際保健協力市民の会のタイや南アフリカ等のエイズ対策について具体的事例が紹介された。地域の人々が主体となることで、持続的な取り組みが可能となることを学んだ。また、シェアは国外のみならず国内における在日外国人支援も行っており、国際保健を途上国の問題ではなく、国内の身近な事例として捉える機会を得た。

ご挨拶

西村 智奈美(民主党衆議院議員/外務大臣政務官)

気候変動、貧困、エネルギー等の国境を越えた課題に対し、日本が国際社会の一員として、リーダーシップを発揮し、継続的に貢献することの重要性が語られた。限りある資金をいかに有効に活用し、課題を解決していくか、そのためには、国際感覚をもち、多様なステークホルダーの調整、協力ができる人材養成の必要性が強調された。政策立案者との質疑応答の機会を得て、参加者は、現実には則した政策提言作成に向けての示唆を得た。

CSRと国際保健医療

金田 晃一(武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーション部 シニアマネジャー)

本講義ではCSRの一環として、「世界エイズ・結核・マラリア対策基金」を通じ、アフリカにおける保健医療人材の育成・強化をはかる寄付プログラム「タケダ・イニシアティブ」を推進している武田薬品工業の取り組みについて伺った。参加者は企業におけるCSR活動の位置づけ、また今後の発展可能性を維持するための戦略を共有した。持続可能な企業と持続可能な社会は相関関係にあり、NGOや国際機関、政府等のパートナーとの連携のもと、企業と市民社会の双方の取り組みにより、社会課題が改善されることを理解する機会となった。

キャリアナイト

「国際保健政策サマープログラム」参加者が、グローバルな活躍をしている若手やミドルキャリアの先輩の体験談を聴き、国際的なキャリアパスを描く際の心構え、参考情報及びネットワークを得る機会を創出することを目的とし、キャリアナイトを実施した。

<パネリスト>

金森 サヤ子(外務省国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官)

金田 晃一(同上)

金平 直人(ソケット 代表)

諏訪 理(独立行政法人 国際協力機構気候変動対策室)



7月30日(金)

国際保健政策とユニセフの活動

平林 国彦(国際連合児童基金東京事務所 代表)

ユニセフという国際保健分野において一翼を占める国際機関の活動体系を知ること、国際保健をグローバルなアクターの視点から捉え直した。さらには、平林氏自身の国際保健に関わるようになった経緯、体験が共有され、人材養成に際するキャリア構築の示唆を得ることとなった。国際社会の安定のために日本が貢献することが、ひいては自国の安全を守ることになる、という国際的文脈と国内的文脈が相互互惠関係にあることが、参加者に共有された。

7月31日(土)

政策提言作成・中間発表会

各班に分かれ、政策提言作成に取り組んだ。中間発表会にて本番同様に発表を行い、メンターより、論理性、実現可能性、プレゼンテーション法等について助言を得る機会を設けた。

8月1日(日)

<発表会>

プログラムの政策提言作成プロセスに沿い、スキル研修、分野横断的な講師による講義、そして班ごとの議論のプロセスを経て、各班が政策提言をまとめ、政策立案者や講師から講評を得た。

時間: 10:00-12:00

会場: 東京大学大学院医学系研究科教育研究棟14階 鉄門講堂

講評者(敬称略):

逢沢 一郎 (自由民主党 衆議院議員)

川田 龍平 (みんなの党 参議院議員)

渋谷 健司 (東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 教授)

谷口 和繁 (世界銀行 駐日特別代表)

式次第

10:00 開会
10:10 衆議院議員 逢沢一郎先生によるメッセージ
10:20 政策提言発表及び参加者、講師からのコメント(20分×4班)
11:40 参議院議員 川田龍平先生によるメッセージ
11:50 コメント/総括
渋谷健司 (東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 教授)
特定非営利活動法人 日本医療政策機構
12:00 閉会

<修了式>

時間: 12:00-12:30

会場: 東京大学大学院医学系研究科教育研究棟14階 鉄門講堂

式次第

12:00-12:20 修了証書授与
12:20-12:30 総括
12:30 閉会



政策提言まとめ

分野横断的なステークホルダーによるレクチャーによる多角的な視座の獲得を経て、各班は、官民パートナーシップや多ステークホルダーによる連携に注目した政策提言を発表した。各班の政策提言では、地球規模の課題解決に向けた各ステークホルダーの強みを活かした連携体制が、途上国の健康課題の解決、ひいては国際社会における日本の安全につながる事が強調された。

テーマ1 「国際保健政策を広く国民に普及啓発するためのアドボカシー活動構築のあり方」

A班

発表要旨

「NEGIイニシアチブ(Newly Established Global Initiative)」の名のもと、日本政府が健診を通じて日本と開発途上国双方の健康増進を図るメカニズム「健診 For Two」を導入し、日本国民に国際保健政策の普及啓発を広く行う。

講評

「なぜ日本が国際保健に取り組むのか」というロジックが明確に説明された。「会社帰り健診」等のサービスを受ける時、途上国の誰かの健康に役立つという意識を醸成でき、途上国の問題を自分の問題として考えるよう促すアドボカシー活動としても興味深い。

B班

発表要旨

企業の国際保健活動への取組みを助成等の政策で推奨し、経済活動を通じて持続可能なたちで日本国民に国際保健への理解が波及する仕組みを構築する。売上の一部を途上国に寄付するキャンペーン展開、途上国向け商品の展開等が対象となる。

講評

国際保健のアドボカシー活動を継続的に行う上で、企業と一般市民が果たし得る役割の大きさに着目し、課題の現状分析、政策案、実施戦略まで丁寧に構築した発表であった。

テーマ2 「国際保健政策分野でグローバルに活躍できる人材を日本から輩出するために求められるアクション」

C班

発表要旨

多ステークホルダーが結集し、国際保健分野での日本の政策提言能力の強化、教育、人材交流を行うグローバルヘルス・シンクタンクを政府主導で創設する。

講評

国際協力の重要性を使命感、対応圧力、自己利益という観点から説明し、日本が国際保健分野で主体的に提言し、貢献を深めるために、国際的に活躍できる人材輩出が必要であるというロジックが、説得力をもって語られた。

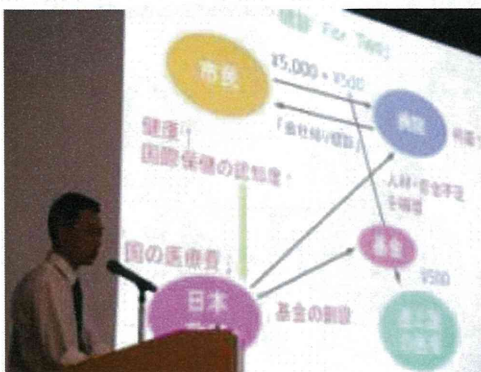
D班

発表要旨

企業とNGOによるBOPビジネスを通じた国際保健課題への持続的な取組みを目指し、それに沿った人材養成アクションプランを設計する。企業とNGO間の関係構築により、企業はNGOへの財政支援を行う代わりにNGOから現地の情報を得ることが可能であり、政府は双方のマッチング等を政策として支援する。

講評

国際保健課題の現状と、そのブレイクスルーとなり得るBOPビジネスの可能性の大きさ、そのための政府・企業・NGOがとるべきアクションプランが明確に説明された。



講師のご紹介

山崎 蘭加	ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト
坂野 嘉郎	JPモルガン証券株式会社
黒川 清	特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事
渋谷 健司	東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策学教室 教授
清水 彩子	外務省 国際協力局 専門機関室 外務事務官 国際保健関係機関担当
谷口 和繁	世界銀行 駐日特別代表
石井 澄江	財団法人 家族計画国際協力財団 (JOICFP) 常任理事・事務局長
Randall N. Hyer	Regional Director of Medical Affairs, Vaccines, Banyu Pharmaceutical Co., Ltd.
西本 麗	住友化学株式会社 執行役員 農業化学業務室アグロ事業部・国際アグロ事業部 ベクターコントロール事業部 担当
水野 達男	住友化学株式会社 ベクターコントロール事業部 事業部長
井上 肇	千葉県 健康福祉部理事
渡邊 学	独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 人間開発部 保健第一グループ長
福元 満治	ペシヤワール会 事務局長 (広報担当理事)
荒木 光弥	株式会社国際開発ジャーナル社 代表取締役・主幹
沢田 貴志	特定非営利活動法人 シェア＝国際保健協力市民の会 副代表理事
西村智奈美	民主党 衆議院議員/外務大臣政務官
金田 晃一	武田薬品工業株式会社 コーポレート・コミュニケーション部 シニアマネジャー
金森 サヤ子	外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官
金平 直人	ソケット 代表
諏訪 理	独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 気候変動対策室
平林 国彦	国際連合児童基金 (UNICEF) 東京事務所代表
逢沢 一郎	自由民主党 衆議院議員
川田 龍平	みんなの党 参議院議員

メンターのご紹介

森 臨太郎	東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 准教授
伊藤 智朗	国立国際医療研究センター
木多村 知美	国立国際医療研究センター
小柳 愛	東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 助教
戸辺 誠	東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室 博士
本郷 寛子	東京大学大学院 医学系研究科 国際地域保健学教室 研究生
村越 英治郎	特定非営利活動法人 HANDS